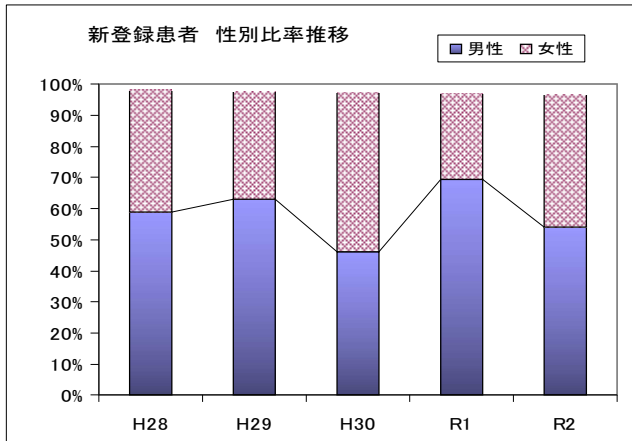


# 令和2年 結核登録者の状況

1 新登録患者数, 罹患率(表1)

区分	H28	H29	H30	R1	R2
新登録結核患者数	39	27	26	23	24
罹患率(人口10万対)	11.4	7.9	7.7	6.9	7.2
菌喀痰塗沫陽性肺結核患者数	10	13	11	8	12
喀痰塗沫陽性肺結核罹患率(人口10万対)	2.9	3.8	3.3	2.4	3.6
潜在性結核感染症患者数(初感染結核)	14	13	8	3	6

(図1)



(表1より)

令和2年新登録患者数は24人, 潜在性結核感染症患者数は6人であった。

(図1より)

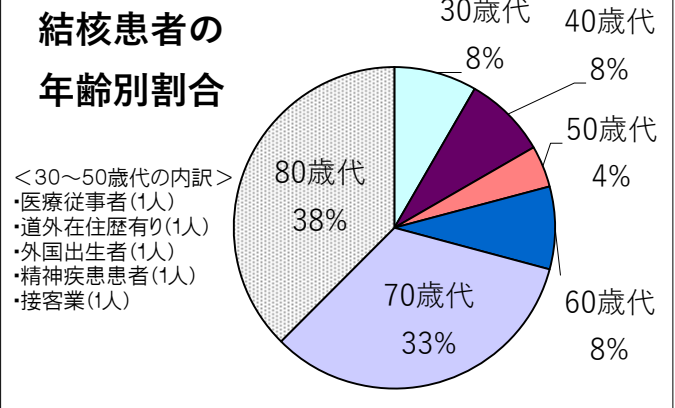
令和2年新登録患者性別比率は男性13人(54.2%), 女性11人(45.8%)と男性が女性より多い状況が続いている。

(表2) 年齢別 結核罹患率

年齢区分	患者数	罹患率
9歳以下	—	—
10歳代	—	—
20歳代	—	—
30歳代	2	6.1
40歳代	2	4.4
50歳代	1	2.3
60歳代	2	4.2
70歳代	8	15.9
80歳以上	9	24.9
計	24	7.2

(図2)

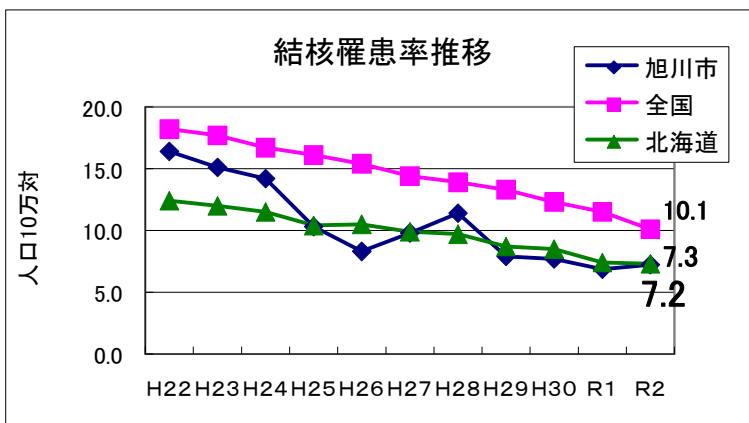
## 結核患者の年齢別割合



(表2)(図2)より

年齢別罹患率は80歳以上が最も高く, 次いで70歳代が高く, 年齢別割合では70歳以上が71%と全体の7割を占めている。20~50歳代の若い世代(5人)については, 図2の内訳のとおり, 医療従事者, 外国出生者等の発病リスクの高い者によるものの発症が多い。

(図3)



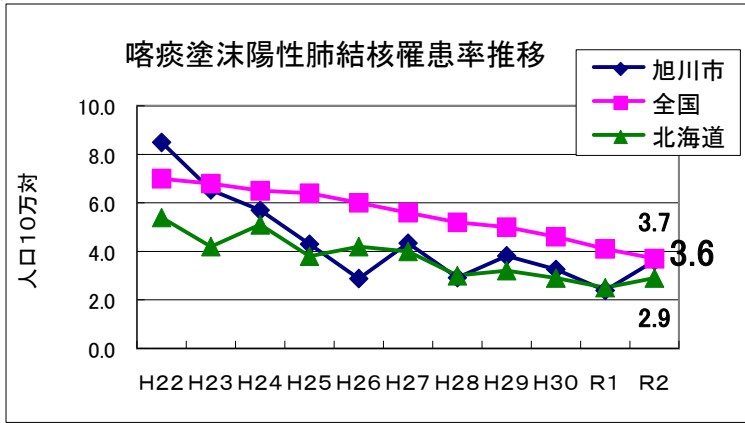
(図3より)

結核罹患率は7.2と, 令和元年の6.9よりも上昇したが, まん延とされる結核罹患率10未満を4年連続達成している。

罹患率は全国, 北海道, 旭川市のいずれも減少傾向にあり, 4年連続で旭川市は全国, 北海道よりも低い罹患率となっている。

※参考: 札幌市 6.8

(図4)



(図4より)

喀痰塗抹陽性肺結核罹患率は3.6(人口10万対)で、令和元年よりも高い値となった。

全国と比較するとわずかに下回ったが、北海道、札幌市とでは旭川市が上回った。  
※喀痰塗抹陽性肺結核: 患者の痰から多量の結核菌が排出されている結核のことであり、周囲の人達への感染源となりやすい

※参考: 札幌市 2.3

## 2 結核登録者数, 有病率

(表3)

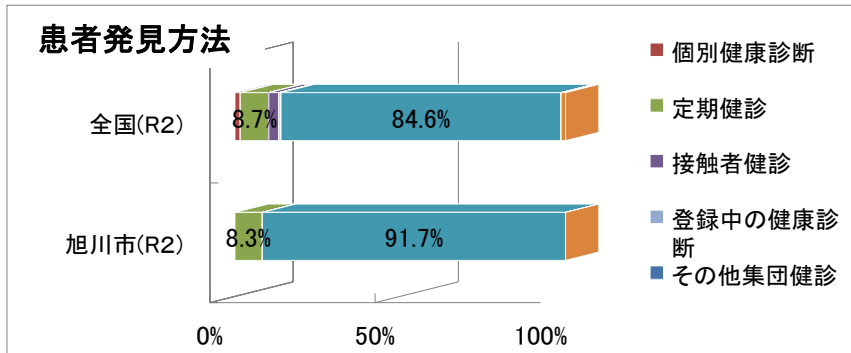
区分	H28	H29	H30	R1	R2
結核年末総登録者数	75	78	70	62	58
年末活動性結核患者数	24	20	21	13	17
有病率(人口10万対)	7.0	5.9	6.2	3.9	5.1
全国有病率(人口10万対)	9.2	8.8	8.3	7.7	6.8

(表3より)

年末総登録者数は58人と、令和元年より4人減少した。うち、活動性結核患者数は17人であり、令和元年より4人増加した。このため有病率は、前年から1.2増加し、5.1であった。有病率は経年的にみると減少傾向であり、全国と比較するといずれの年も全国を下回っている。

## 3 新登録患者結核病類

(図5)



(図5より)

新登録患者24人の発見方法は全国と同様に、医療機関受診が22人(91.7%)と最も多く、次いで定期健診が2人(8.3%)となっている。

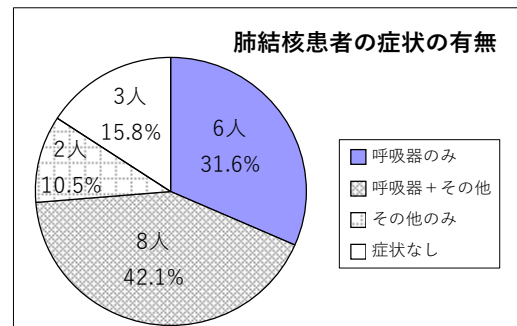
表4 登録時結核病類 ※新登録患者24人。複数診断あり

病名	人数	割合
肺結核	22	91.7%
気管支結核	0	0.0%
結核性胸膜炎	11	45.8%
粟粒結核	3	12.5%
肺門以外のリンパ節結核	1	4.2%
皮膚結核	0	0.0%
脊椎結核	0	0.0%
結核性心膜炎	0	0.0%
腸結核	1	4.2%

(表4より)

新登録患者24人の結核病類においては、肺結核が22人(91.7%)であった。肺外結核は結核性胸膜炎が11人(45.8%)、粟粒結核が3人(12.5%)、肺門以外のリンパ節(頸部リンパ節)結核と腸結核がそれぞれ1人(4.2%)であった。

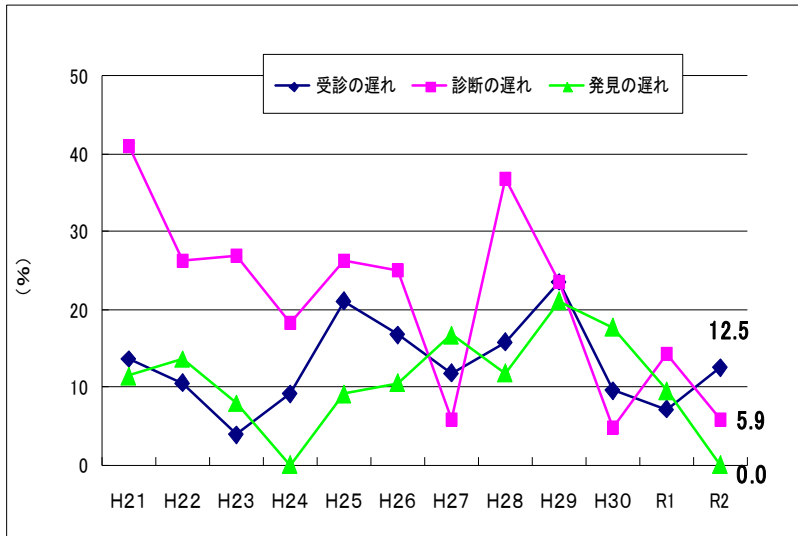
(図6)



(図6より)

肺結核患者19人うち16人(84.2%)が有症状であり、そのうち呼吸器症状があったのは14人(73.7%)となっている。(発生届のデータを集計しているため、患者分類における肺結核の人数と異なる)

4 新登録有症状肺結核患者の受診・診断・発見の遅れ (図7)



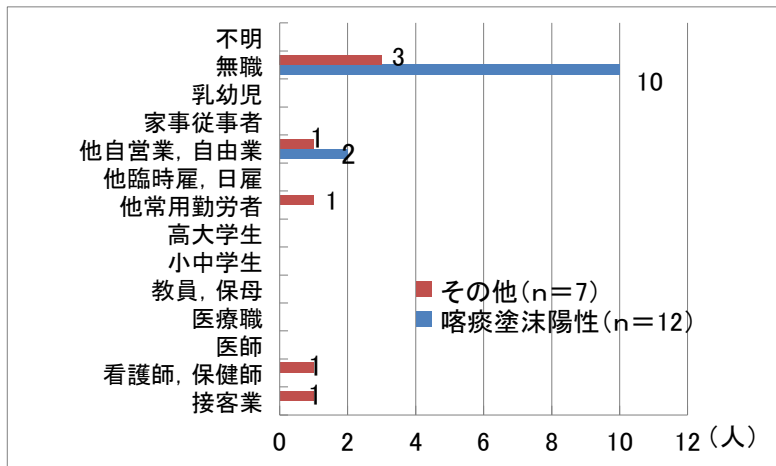
(図7より)

有症状の肺結核患者16人のうち、発病から初診までの期間が2か月以上(受診の遅れ)の者は2人(12.5%), 初診から診断までの期間が1か月以上(診断の遅れ)の者は1人(5.9%), 発病から診断までの期間が3か月以上(発見の遅れ)の者は0人(0%)となっている。また、発病時期が不明であった者は16人の中にはいなかった。

全国との比較では、いずれも全国より低い割合となっている

※参考: R2 全国 受診の遅れ 19.1%  
 診断の遅れ 20.9%  
 発見の遅れ 19.7%

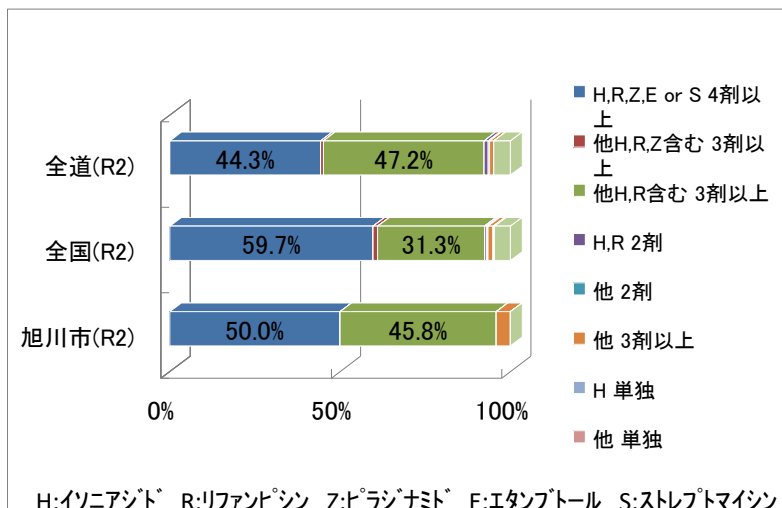
5 新登録肺結核患者 登録時職業 (図8)



(図8より)

新登録肺結核患者19人の登録時職業は無職が13人(68.4%)と最も多く、19人のうち13人が65歳以上であったことが影響していると考えられた。

6 新登録患者化療内容 (図9)



(図9より)

新登録患者24人の化療内容はH,R,Z,E or S4剤以上使用していた者が12人(50.0%)と昨年の10人(43.5%)より増加し、割合も最も高かった。他H,R含む3剤以上使用していた者が11人(45.8%), 他3剤以上の者が1人(4.2%)と、24人全員が3剤以上での治療を行うところであった。

また例年同様に令和2年においても、全国・全道と比較して標準治療を行えた者の割合が高くなっている

H:イソニアジド R:リファンピシム Z:ピラジナミド E:エタンブトール S:ストレプトマイシン

7 薬剤感受性試験結果  
(表5)

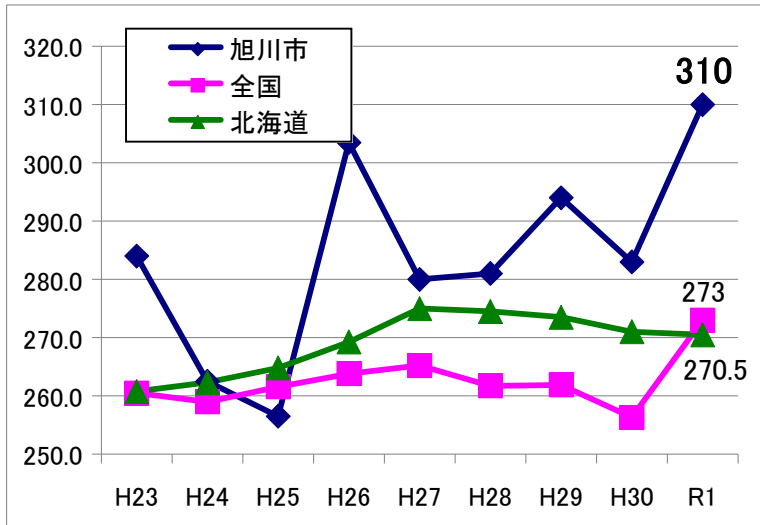
	人数	割合
結核菌培養陽性患者	18	
薬剤感受性試験実施者	18	100.0%
HR耐性	0	0.0%
SM耐性	0	0.0%
HRSE全てに感受性	18	100.0%
薬剤感受性試験未実施者	0	0.0%

(表5より)

新登録肺結核菌培養陽性患者18人のうち全員(100%)に薬剤感受性試験を実施し、全員がHRSE全てに感受性があった。HSRE以外の薬剤ではPZA耐性が1人であった。

また、肺外結核患者1人にSM耐性があった。

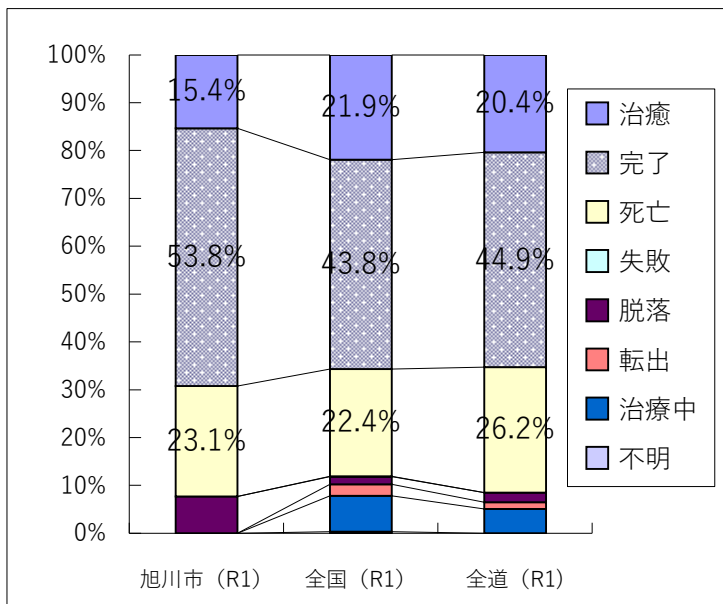
8 令和元年全結核治療完遂継続者治療期間中央値  
(図10)



(図10より)

令和元年新登録患者の全結核治療完遂継続者治療期間中央値は310日と、前年より増加した。旭川市は全国・全道と比較すると治療期間が長くなる傾向にあるが、要因として、高齢者の患者が多く、副作用等により減感作療法を実施した結果、治療期間が長引く者が多いことに加え、令和元年は持病の治療によりINH・RFPが使用できない者や医師の判断で約2年間治療を継続した者がいたこと等が考えられる。

9 令和元年新登録活動性結核患者 治療成績  
(図11)



(図11より)

令和元年新登録活動性結核患者26人の治療成績において、治癒は4人(15.4%)、完了は14人(53.8%)で、治療成功率は69.2%であり、全国・全道より高い割合であった。

また、死亡が6人(23.1%)のほか、脱落が2人(7.7%)だった。

失敗は0人で、特定感染症予防指針の目標値である5%以下を満たしていた。

※脱落2人の内訳  
(紅皮型薬疹1人、持病の治療終了に伴うLTBI治療中断1人)